

「里親」である佐藤眼科院長の佐藤友哉先生にプログラムについての感想を伺いました！！

滋賀県湖西地区への宿泊研修参加学生の感想文（抜粋）より↓↓

昨年より里親をさせていただいている佐藤です。私は昭和58年に滋賀医大を卒業した同大学3期生で、現在は滋賀県甲賀市水口町で眼科を開業しています。

このプログラムに参加したのは、支援室の発起人であります永田教授が眼科医局の先輩、埜田准教授は同級生なので何となく気軽に参加できそうな気がしたことがひとつの理由です。もうひとつは自分自身が滋賀医大を卒業して四半世紀以上となり、訪問することが希になってきている母校に在学する学生達は今どんな風になっているのかなど興味を持ったからです。

学生とのマッチングが行われた結果、「昨年秋に一年生の学生さんの里親になりました」と支援室から連絡がありました。学生さんとの連絡手段はメールということで、何度かメールを交わした後、とりあえず顔を合わせようということで昨年の師走のある日、草津駅近傍の居酒屋で会い、飲み会となりました。学生支援という古い私の中では「苦学生を経済的、精神的に援助するため」といったイメージだったのですが、そこにいた滋賀医大一回生の彼は苦学生とはほど遠い今風の好青年でした。私自身の子供と同じくらいの年齢の学生さんですが、お互いに「里親による学生支援プログラム」について深い内容は知らずに、何となくのノリで参加している者同士でした。

今回この原稿の執筆依頼がきて改めてこの学生支援プログラムを読み直してみると、「数年後に滋賀医大を巣立つ未来医師たちに滋賀県の地域医療にも目を向ける機会を提供し、地域医療の良さと問題点に接することで、実際に滋賀県のそれぞれの地域で医療活動を志向する医師が増えること」が目的と理解したのですが、いかがでしょうか？

自分が学生の頃のことを思い出してみれば、卒業の直前では専攻する科を決めるのが精一杯で、研修をどこで行うかなどを考える余裕もなければ知識や情報もありませんでした。私が卒業した当時は、医学生の卒後は大学か自分の故郷の大学に入局することが普通だったように記憶しています。当時は情報の乏しい社会でしたし、ちゃらんぼらん自分でもありましたので何となく大学に残りました。今考えてみれば満足できる選択だったように思っていますが、現在の学生さんはネット社会ですので情報は溢れかえっています。色々なことを知ることが出来ることは素晴らしいことですが、知識だけで頭でっかちになっていませんか？実際の医療場面を見たり、そこに携わる医師やコメディカルと触れ合うことで、全く新しい感情や知識が生まれてくると思います。このような意味でこの里親事業は素晴らしい未来を持ってくると期待します。

今回マッチングで決定した彼は、まだまだイケイケの医学部一年ですが、卒業までの幾年かのそれぞれの時期に色々なことで悩むことがでてくると思います。そんな時に相談役になれたらいいかなと思います。

それからもう一つ、私は三人姉妹の父親なのですが男の子供がいませんので息子に対してのおやじ面もしてみたいなとニマリしているわけでもあります。

朽木診療所では、一人で広域を任されていることに誇りを持っているというお話を聞きました。僻地医療は大変であると同時にやりがいがあるのだ、ということを実際に働いていらっしゃる先生から聞くことができたのは、今回の研修で最も印象的でした。また、三井寺や針江地区なども観光し、おいしい食事もいただき本当に楽しい研修旅行でした。

私は今まで、僻地で働くという大変そうなイメージばかりが先行していましたが、朽木を訪れたことでこういう場所での暮らしもまた違った楽しみがありそうだという前向きなイメージも持つことができました。今回の研修で感じたことを活かして、「私はどんな医師になりたいのか？」と自問自答し続けていこうと思います。

地域の方々はとても温かく、また実際に地域医療に携わっている先生方から地域医療のやりがいや大変な点、これからの大学生活のアドバイスなどを伺うことができ、とても勉強になりました。



湖西の方では雪景色が広がっていて、自分の知らなかった滋賀県の姿に触れることができた気がします。寒さの中でお坊さんが修行をされている聖興寺、滋賀県伝統のフナ館、針江の人々の生活を支えている湧水、ホテルのような老人ホームで楽しく笑うおばあちゃん的笑顔など、滋賀県には光るものがいっぱいありました。朽木診療所の先生が「まずは患者さんの住む周りの環境を肌で感じる事が大切なんです。」とおっしゃったのを聞いて、里親旅行に参加することで自分が得られたもの大きさを実感しました。本当にありがとうございました。

この研修旅行で、私の「将来なりたい医師像」がまた一つ膨らみました。そのきっかけを作ってくれたのが、診療所訪問でお世話になった野村先生と松本先生です。晩御飯の交流会の時間に、治療をする際にいかに患者の周りの環境を考慮することができるかといったお話を伺いました。私は「患者の人数分だけ治療法もある」のだなと思いました。

今回の研修で強く感じたことは、現地を実際に訪れてみるということが想像できるようになるということである。地域の人々の生活を知り、そこに暮らしている人の医療的ニーズをくみ上げるような医療を展開することがこれからの地域医療に求められていると思いました。

専門にも興味はありますが、どの科でも診療できる僻地医療にも興味を湧いて、とても勉強になった宿泊研修となりました。



里親の佐藤先生と学生との交流の様子



佐藤 友哉先生（医学科3期生）

里親学生支援室より

